



『阿呆墮落偈 (け~そ)』
『念仏会』(ブログ用管窺天記)より
法話『今將談仏力 (後席)』
御同行より
『興禅寺さま報恩講にて (第一回)』
小合あゆみさん
お知らせ
編集後記

聞見会

前川五郎松著
『阿呆墮落偈』
(きくそ)

《き》「聞くときは、さこそさこそと思えども、その場、過ぎればあとかたもなし」。人並み、名聞利養、居眠り半分、暇つぶし、これで助かりや、外道法。

からずとおしえたり」と御開山さまは言われているが、クそうじゃケド、ケドの根性が生まれる世界が「化土」らしい。《こ》業を減すること能わず、縁無き衆生を度すること能わず、衆生界を度し尽すこと能わず・・・これを「仏の三不能」と言う。聞かせてもろた。うらは、この三不能が知れることのほかに、お助けはないといたい。

自分に遇うてビックリした。《す》好きじゃ、嫌じゃで人間は苦勞する。人間は知恵がありすぎる。ひとを、われの思い通りにしたいクセがある、わるいクセや。こちらが、ひと様に任せたら楽だろなあ。《せ》せちがらい忙しい世の中で、仏法なんか聞いて居られるかいと言うが、心が忙しいだけや。温泉へ行つとる暇もある、馬鹿口たたいている暇もある。《そ》葬列や、火葬場の煙に日曜なし。今日も小山で煙が立つ。あすの煙は誰の番かな。うらではない。

※うらら(福井弁)我、私、俺等、自分を指す言葉

林遊さんのブログより

ようかんきてんき 用管窺天記

編集者お気に入りの記事を、林遊さんの許可をもらって転載しています。

ねんぶつえ 念仏会

過日「聞見会」の念仏会に参加してきた。会といっても通常は同行^{※1}の慈海坊さんと二人しかないのだが、珍しく参加者がいて三人で、なんまんだぶを堪能してきた。

念仏会^{ねんぶつえ}といっても、いわゆる『観念法門』^{かんねんほうもん}※2にいわれる『般舟三昧経』^{はんしゆさんまいきやう}のような観念仏^{かんねんぶつ}※3ではなく、ひたすら口に、なんまんだぶと称える念仏会である。寝そべって称えようが、端座合掌^{たんざがっしやう}※1として称えようが、五体投地^{ごたいとうち}※1として称えようがかまわない、各自が勝手に、口になんまんだぶを称える会である。合間にご法義の話を挟んでの

二時間であるが、世間の目から見れば奇異に見えるだろうと思ふ。

浄土真宗では称名は讚歎^{さんたん}※4行である。大谷派の金子大榮師は、浄土というのは音の世界、音楽の世界ですと示して下さった。はじめて読んだときには意味が分からなかったが、『浄土論註』^{じやうどろんちゆ}下で「莊嚴妙声功德成就」^{じやうごんみやうしやうくどくじやうじゆ}を釈して「此是国土名字為仏事（これはこれ国土の名字、仏事をなす）」という句をみて少しく分かったように思えたものだった。

ともあれ一人でつぶやくような、なんまんだぶもあるし、他者と時間を共有して称える讚嘆行としての念仏も、またありがたいものである。

そのような意味でかって読ん

だ、武内義範著『親鸞と現代』「行為と信仰」から、象徴的行為としての念仏についての文を引用しておく。

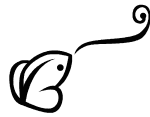
上述のごとく『教行信証』の『行巻』の初めでは、行ということは「無碍光如来の名を称するなり」とされている。すなわち念仏を称えることとして、最初に概念が規定されている。その意味ではあくまで能行^{のうぎやう}※5としての行を問題にしているが、親鸞はその能行としての行を「諸仏咨嗟の願」、すなわちすべての仏が阿弥陀仏の名号を讃めたたえるという第十七願から出ていると考えている。その場合に第十七願から出ているとして考えられる行の概念は、さきの単なる能行としての念仏の行為というものよりは一層広く一層深い意味に解釈されていて、称名という行為はいわば

象徴的な行為となってくるように思われる。

すなわち能行としての行は、そのままそれが象徴的行為として、すべての仏、一切の衆生、一切の世界のありとあらゆるものが仏の名をたたえている、その全体の大きなコーラスの中に流れ入れ込み、融入している。阿弥陀仏の名をたたえることが、大いなる称名の流れのなかに、つまり諸仏称揚、諸仏称讃の願の内容に流れ入っている。そこでは、行の意味は単にひとりの人間の行為ではなくて、その行為自身が実は深い象徴的な根底をもっていることとなる。だからその行為によって、象徴的な世界が開かれて、私自身の称名の行為がその象徴的な世界のなかに映されている、とそういふふうに考えられる。

家の爺さんや婆さんは、「声によるお莊嚴」ということを言っていたが、衆生の称名が、諸仏の称名に巻き上げられて「諸仏称名 衆生聞名」と聞こえてくれる世界もあったのである。ありがたいこっちゃ。

なんまんだぶ なんまんだぶ
なんまんだぶ なんまんだぶ



〔注釈〕

※1. 【同行】共に念仏の教えを聞き行ずる人々。(御同行 御同朋とも言う)

※2. 【観念法門】善導大師(六一三・六八一)の著。『観経』『般若三昧経』などによって、阿弥陀仏を観ずる形相・作法・功德などが述べられている。

※3. 【念仏】仏を念ずること。真如を念ずる実相の念仏、仏のすがたを心に思い観る観想の念仏、仏像を観ずる観像の念仏、仏の名号をとなえる称名念仏などがあり、聖道門では、実相念仏を最勝とし、称名念仏を最劣とみる。しかし浄土門では、称名は阿弥陀仏の本願において選び取られた決定往生の行であり、極善最上の法であるとする。

※4. 【讚歎】仏徳をほめたたえること。五念門の一。

※上記注釈の出典

(教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典(注釈版)第二版』本願寺出版社)

(教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典(注釈版)七祖篇』本願寺出版社)

〔編集者注〕

*イ. 【端座合掌】姿勢を正して、また、正座して、合掌すること。

*ロ. 【五体投地】体全てを地に投げ出すこと。合掌して両ひざ、両ひじ、頭を地につける。仏教では最高の敬礼法。

*ハ. 【能行】行の主体者。「所行」(行ぜられる対象)に対して、その行を行うものをいう。

(ブログ公開日…

平成二十六年十二月二日)

法話

今将談仏力

(後席)

釋慈海

他利と利他と、談ずるに左右あり。もし仏よりしていれば、よろしく利他といふべし。衆生よりしていれば、よろしく他利といふべし。いままさに仏力を談ぜんとす、このゆゑに利他をもつてこれをいふ。まさに知るべし、この意なり。

〔顯淨土眞実行文類 重釈要義…
他方釈〕

さて、引き続き仏さんのお話です。

前席では仏さんというのは、「不可称・不可説・不可思議」とても言葉にできるような世界の話ではないというお話をいたしました。ですから、仏さんの話というのは、そもそも矛盾してるわけです。「仏さんの話」なんていうのはありえない。言葉に出来んのですから、話すことも聞くこともできませんでした。

ですけど、曇鸞大師という方が、とんでもないことを仰った。この曇鸞大師という方は、今から千五百年ほど前、西暦四七六年から五四二年に、今の中国の山西省あたりにいらっしやった方です。雁門と言わる場所です。ちやうど北京の南西、北京

と西安のちやうど真ん中あたりです。この曇鸞大師のエピソード、なかなか興味深いお話がたくさんあるのですが、ここではちよつと時間の都合上割愛します。ともかく、この曇鸞大師は、天親菩薩の「浄土論」の注釈、つまり解説書を遺されていらっしやる。「浄土論註」とも「往生論註」とも言いますが、その書物の中にあるのが、今日のご讚題です。

このご讚題の中に、こういう言葉がありました。「いままさに仏力を談ぜんとす」。漢文ですと「今将談仏力」と書きます。「今、将に、仏力を、談ぜんとす。」普通に聞いていけば、「ふんふん、それで？」とさらっと流してしまいそうな一節です。特に気に留めるような言葉

じゃあないかもしれません。ですけど、実はこれが、とんでもないことを仰ってるわけです。何がとんでもないか？一文字ずつジックリ見てみましょう。

まず最初に「今」とあります。これは、そのまま時間の「今」ということですが、ただこの「今」じゃあないです。

どういうことか？ちよつと喩えでお話しましょう。私は母親と二人暮らしているんですけど、まあ、よく親子喧嘩をするわけです。たいていは母親が正しいんですが、私も負けず嫌いでして、売り言葉に買い言葉、ついついキツイ言葉で言い返してしまったりするわけです。実はこの前も、母親と喧嘩になりました。うちにはネコ

が二匹いまして、このネコの面倒は、私がやることになってるわけです。ネコを飼ってらっしゃる方はよくご存知やと思うのですが、ネコに限らず犬もそうですが、この毛の生えたもんちゅうのは、まあ、よく毛が落ちる。春先とかになると、廊下を歩けばふわふわふわふわ、扉を開ければふわふわふわふわと、ネコの毛が舞うわけです。うちの母親は綺麗好きでして、これが気に食わない。毛の一本でも落ちてると「あんた！ちゃんと掃除しなさいよ！」と大騒ぎなわけです。すると私はいつもこう応えるわけです。

「今やるって！」

これが、私らの考えている「今」です。こんなの、本

当の「今」じゃあ無いですよ。正確に言えば「後でやる」ですわ。得てして、私らは「今」を「後で」という意味で使ってることが多い。病氣の人に対して「今に良くなるから」というのは、今すぐ良くなるという意味じゃない。いつかはわからないけど、近い将来ということですよ。勝負に負けて「今に見ておれ！」と捨て台詞を吐いても、やり返すのは今すぐじゃなくて、後なわけです。

ですが、「今、将に」とここので曇鷲大師が仰ってる、この「今」というのは、本当の今です。ごまかしのない、今すぐの今。ココで言えば、まさに、このお説教の場が、この「今」なわけです。

次に「将」です。「まさ(に)」

と読みますが、この「将」という字ですぐ連想されるのが「將軍」という言葉じゃないでしょうか。これ、もともとどういう意味の文字かというのと、「まっすぐ、そのまま、一直線に、率いて行く」という意味です。まさに、將軍というのはそういう人のことですよ。軍隊を率いて、敵に向かって一直線に、寄り道することもなく軍隊を率いて向かっていくのが將軍というものです。これが、「ちよつとあの団子屋によっていこうか」とか「あれ？敵はどっちやっただかなあ？」とウロウロしているようでは、將軍とはいえませぬよね。つまり、これは、この後続く「談」と「仏力」という言葉が、まっすぐ、そのまま、ぴたーっと、繋がってますよ、というの、この「将に」

という言葉です。

次は「談」について。この「談」という言葉、言偏に火が二つ並んでます。言偏が付いていることから、もうお分かりの通り、これも「言葉にする」という文字です。例えば、「対談」というのは、面と向かって言葉をかわすことですね。「談笑」というのは、笑みをもって語らうということです。さて、じゃあここで、曇鸞大師は何を談ずる、つまり言葉にしようとしてされているのか？それが、最後の「仏力」でした。

何度も何度も繰り返しましたが、この「仏」というのは、「不可称・不可説・不可思議」称することも、言葉にすることも、思うことも考えることも、できません。その「力」、ここでは、この「力」と言

うのを「ハタラク」と読みましようか。この「不可称・不可説・不可思議」の「ハタラク」を、曇鸞大師は、「今、将に、仏力を、談せんとす」そう、「言葉」にする。ちゅうてるんです！こんなことは絶対に言えませんが、でも、曇鸞大師はそう言い切った。

これにひっくり返ったのが、御開山親鸞聖人様でした。おそらくですね、おそらくです。御開山聖人は、この「今、将に、仏力を、談せんとす」の言葉で、この曇鸞大師のあらわされた「論註」という書物の読み方が、ガラーーと変わったんでしょね。

すみません、ちょっと興奮しすぎて、喉がカラカラになってしまったので、水を一杯いただきました。

きます。

(小休止)

さて、この仏力の「力」を、「ハタラク」と言いましたけど、よくよく考えてみますと、私ら人間が生きていくちゅうことは、ハタラいて行くちゅうことかもしれない。ハタラク「ちゅうのは、別に仕事をすることだけが「ハタラク」ってことではないです。

例えば、先ほど私は水を一杯いただきました。この水を飲むということ一つをとってもそうです。コップに注がれた水を飲むためには、まず、この右手をハタラかせて、このコップを持たせ、ハタラかせて、このコップを口元まで運ばさせます。

それで、手首をハタラかせて、ぐーっとコップを傾けさせるわけです。それだけでしたら、水は口の中に入って行きませんから、今度は自分の顎をハタラかせて、口を開けるわけですよ。で、流し込んだ水を、べろをハタラかせ、喉をハタラかせて、腹の中に落としていくわけです。腹の中の内蔵をハタラかせて、水を体の隅々まで行き渡らせて……と、単に水を飲むというだけでも、体のいろんな箇所をハタラかせないといけない。ご飯を食べることもそうです。箸を持つために、また、お茶碗を持つために、先ほどのコップと同じようにこの手と腕をハタラかせて、顎も、べろも、喉も、内臓もハタラかせて、目の前のごちそうを、この体の一部にして、この身を、命を、養っていくわけです。

飲み食いだけじゃないです。

本を読むのも、テレビを見るのも、寝っ転がるためにも、この体の筋肉やら骨やらいろんな無数のものを、ハタラかせているわけです。どこかに行くのにも、この脚をハタラかせないと、どこにも行けません。お便所に行くにもそうです。何をすることも、この体をハタラかせないと、なーんにもできない。

体だけじゃないですよ。例えば、隣の奥さんとうわさ話をする時、ぐうたら息子に愚痴をいう時、旦那さんと口喧嘩をする時、まあ、そういうことばかりではないでしょうが、人に何かを伝えようとする時には、この口をハタラかせて言葉を使います。言葉を使うために、この口をハタラかせるわけです。

でも、口だけパクパク動かしなくても、言葉が出てくるわけではないですよ。口だけじゃなく、この頭をハタラかせているわけです。色んなモノを経験し、記憶して、色んなコトを考え、色んなモノゴトを学んできた、この頭をハタラせて、たくさんの言葉を、この口から発しているわけです。

心もそうです。常に、まるで静かな水面のように、さざ波ひとつ起きない、シンとした、穏やかな、そういう状態にいるわけではなかったですよ。どちらかと言えば、台風のとぎの海原のように、波立ち、泡立ち、逆巻き、ゴウゴウと音を立て続けているのが、この心というもんじゃないでしょうか。たとえ一時、穏やかな心になっていても、

ちよっと何か一言言われると、とたんにパーンと怒り沸騰し、またシヨボーンと落ち込み、キラキラと明るくなったと思えば、また次の瞬間にはドンヨリと暗転する。本当にこの心の内は、騒がしく忙しいもんです。そうやって、常に心を騒がしく、忙しくハタラせて、生きています。生きて行くというのは、本当に、この身、この体を、言葉を、心を、ハタラかせて、ハタラかせて、ハタラかせて、ハタラかせていく、ということかもしれません。

さて突然ですけど、ちよっとご自身の手のひらを見てみてください。………、どうですか？ 綺麗な手をしてますか？ シワひとつ、キズひとつない、綺麗な手でしょうか？ 赤ん坊なら、綺麗な、まるで紅葉もみじのような、可愛くて、す

べすべの、ぷっくりした手かもしれません。ですが、失礼ですけど、まあ、自信を持って「私の手はそんな赤子のようだ！」と言える方は、そうはいらっしゃらないかもしれません。今までハタラかせて、ハタラかせて、ハタラかせて来た手です。文句ひとつも言わずにハタラいて来てくださった手です。その手にね、今までどんだけ綺麗なものをさ触さわらせて来ましたか？ どうですかね？ 実は、綺麗なモンよりも、そうじゃないモノばかりを触さわらせて来たんじゃないですか？

こう言うのですね、「いや、私は今まで野良仕事なんかしたこと無いし、歳の割には綺麗な手をしてるって言うわけじゃない！」って仰る方が、たまにいらっしやるんですけど、そん

ならあなたは御飯食べる前に手を洗わのですか？と聞くと、「洗うに決まってるでしょ！」と怒られる（笑）。綺麗な手なら洗う必要ないでしょ。綺麗ではないから、御飯食べる前に洗わんとアカンのです。

話が飛びまくりですが、昔は子供を育てるにも、オムツは布やったそうですね。かくいう私も、布オムツで育ったと聞いています。そういうオムツをした赤ん坊がいますよね、時折ぷーんと、その赤ん坊から、芳しいあの匂いがしてくるわけです。そうするのですね、「あらあら、くちやいねくちやいねえ。さあさ、綺麗にしようねえ」とか言いながら、お母さんは赤ん坊のオムツを替えてやるわけです。でね、綺麗なオムツにかえたその赤ん坊背負って、

そろそろ買い物でも行きましようか、と玄関出たところですね、またぷーんと匂いがしてくるわけです（笑）。布ですからそのオムツをポイと捨てるわけにいきません。しぶしぶながら、再び赤ん坊を柔らかいタオルかなんかの上にそつと寝かせましてね、さつき替えたばかりのオムツを、再びもう一度解きまして、お尻を綺麗に拭いてやって、ぐずる赤ん坊に、今戻るからね、ちょっと待っててねと、声をかけながら、外の流しに汚れたオムツを持って行きまして、石鹼を泡立て、ゴシゴシゴシと洗うわけです。夏の暑い日なんか、もう汗だくですよ。そんな時に、赤ん坊の汚物が手に付こうが気にしてられません。若いお嬢さんの時には、ちよつと裾に泥がはねただけで、キャアキャア騒いでいたけれども、今はそ

んなこと言ってられない。それどころじゃない。お出かけの化粧は落ちて、せっかく纏めた髪もボサボサにしながら、赤ん坊の汚物を直に手でゴシゴシゴシと洗うわけです。昔の人はこう言うたそうです「子供一人育てるには、アツパ一升食わなアカン」。アツパちゅうのは、福井弁でウンチのことですけど（笑）、まあ、子供一人育てるということは、アツパ、つまり子供のウンチを一升ほど口の中に入れて行く様なものだ、ということだそうです。噛み砕いて言えば、子供を育てるのは、綺麗事や無いちゅうことでしょう。

私たちの生きている現場ちゅうのは、決して綺麗事ではないんです。動けば汗もかく。仕事をすれば垢も浮く。手に触れるものは汚れたもんばかりで、ホコリまみれなりながら、この体

をハタラかせて、ハタラかせて、ハタラかせ続けて行くというのが、生きていくちゅうことでしょう。決して、綺麗事では、生きていくことができんです。

長いこと生きてたらですね、脚も弱ってきます。「そうか、今日はどこそでお説教あるか。お参りせんとなあ」と思うても、脚が痛うてよう参られん。「でもな、せっかくのご縁やし、参らせてもらおうかの」と、痛い脚をハタラせて、このお寺にお参りにいらっしやったわけでしょう。

この口をハタラかせて出てくるもんもそうですよ。口を開けば愚痴もでます。人と話せば悪口も出ます。何時も綺麗な言葉遣いをしていよう、あんまり浅ましいこ

とは言わんところと思うていても、ついつい口からは愚痴が出て、悪口も出て、おべっかも出ます。嘘だつて時にはつかにやあなりません。オホホと笑って、本当の事ではないことばかり喋っていたら、アホと思われるか、もしくは世間知らずと思われちゃいましょう。そんな生き方してたら生きづらいだけです。人の世の中で生きるちゆうことは、そんな綺麗なコトばかり言っちゃられないんです。

そして心もそうですね。先ほども言いましたけど、いつも静かで波一つ立たない、清らかで穏やかな心ではいられないんです。いくら外から見たら涼しい顔をしていても、いくら歯を食いしばって、誰にも心の内を気付かれまいとしても、実際の心の内は、ざんざか降りの大雨の

時もあります。今にも噴火しそうな火山のように轟々と噴煙を上げていることもあります。誰にも見せられないこの心というものも、この身と同じく、今まで一時も休まることなく、ハタラキ続けていました。

このハタラかせ、ハタラかせ、ハタラかせ続けている身と口と心を、今もまたハタラせて、ここに、お参りに来られたわけでした。そして、そのハタラかせ通しの手を、今は仏様の前で合わせていらっしゃるわけです。この合掌する姿というのは、ほんとうに美しい姿ですね。そうやって手を合わせ、さらには、その口を開いて、「ナンマンダブナンマンダブナンマンダブ…」と、お念仏を申されているわけでした。

「煩惱に眼まなこさえられて」の

言葉通り、私らは仏様のお姿を見ることはできません。「不可称・不可説・不可思議」のその仏様のお姿を見ることも、その仏様のおハタラキを、知る術すべもないんです。ですけど、よかったですね！私らは、この耳で、仏様を知ることが出来ました。「ナンマンダブナンマンダブナンマンダブ…」と称とまえることのできる、耳に聞くことができる仏様に、遇あうことが出来ました。

その仏様のお力、おハタラキが、今ハタラいて、この心と、体をハタラかせて、そしてこの口にお念仏を称えさせ、その耳に仏名を聞かせしめているわけでした。これを、「本願力不思議」不可思議なる仏力、如来のハタラキ、本願の、ハタラいている相すがた（すがた）というんです。

つまり、今、将に、こうやってお参りなさって、手を合わせ、お念仏をしている、このすがたこそが、この本願力不思議の、仏力が顕れているおすがたそのものでした！

これを、昔の方はうまいことをおっしゃいますねえ。こんな風に歌になさっていらっしゃいました。

「引く足も、称とまえる口も、拜おがむ手も、彌陀願力の不思議なりけり」

本日は、ようこそ、ようこそ、お参りでございました。なんまんだぶ、なんまんだぶ、なんまんだぶ

※某所でのご法話お取次ぎを録音したものを元に、加筆、編集して掲載しました。

御同行より

興禅寺さま

報恩講にて

(第一回)

小合あゆみさん

〈ご讃題〉

「ああ、この大いなる本願は、いくたび生を重ねてもあえるものではなく、まことの信心はどれだけ時を経てでも得ることはできない。思いがけずこの真実の行と真実の信を得たなら、遠く過去からの因縁をよろこべ。もしまた、このたび疑いの網におおわれたなら、もとのように果てしなく長い間迷い続けなければならぬであろう。如来の本願の何とまことであることか。摂め取ってお捨てにならない

いという真実の仰せである。世に超えてたぐいまれな正しい法である。この本願のいわれを聞いて、疑いためらってはならない。」

(顕浄土真実教行証文類
総序 現代語訳)

〈ご挨拶〉

みなさん、こんにちば。今日はこちら興禅寺さまの報恩講法要にお参りさせていただき、ありがとうございます。

わたしは大阪から参りました、小合あゆみと申します。どうぞよろしく願いいたします。

いつもは、今、みなさんが座っておられる場所に座ってお聴聞しています。今日はこちらに立たせていただいて、阿弥陀さま

に見守られながらお話をさせていたただいておりますが、たいへん緊張しております。みなさんにリラックスして聞いていただけると、私もリラックスできると思いますので、よろしくお願いたします。

〈報恩講〉

さて、報恩講というのはわたしたち真宗門徒にとって、一番大切なご法事です。一月におつとまりになります、ご本山での御正忌報恩講にお参りできるように、お別院やそれぞれのお寺では、時期を早めて「おとりこし」と呼ばれる報恩講がおつとまりになります。

この報恩講ですが、親鸞聖人のお徳を讃え偲ぶだけではないのではないかなあとと思います。

二千五百年前にお釈迦さまが悟りをお開きになって、そのみ教えがインドから中国を経て日本に伝えられました。教えだけがぼんと日本に伝わることはなくて、多くの方たちのご苦労があつて日本に伝えられました。

中国からインドにお経さまを求めて旅をしてくださった三蔵法師と呼ばれる方々。日本に伝えられた仏教をよりどころとしようと、仏教を広めてくださった聖徳太子さま。命がけて日本に渡ってこられた鑑真和上。中国に行って仏教を学んでこられた空海さまや最澄さま。数多くのお経さまの中から、私たちに必要なお経さまを選び勧めてくださった七高僧さま。

たくさんのお坊さま方、そしてそのお坊さま方を支えてくださ

された方々のご苦労とお働きによつて、お浄土のみ教えは親鸞さまに届けられました。

そしてそのみ教えは、またたくさんの方々によつて、今、ここに伝えられています。

お坊さまだけではありません。先だつていかれた有縁の方々、そして今、一緒に時を過ごしている有縁の方々によつて、伝えられ届けられてきたお浄土のみ教えです。

ですから、この報恩講さんは、親鸞聖人、そして多くの多くの方々に、想いを馳せる法要ではないかなあと思います。

〈自己紹介〉

わたしは大阪生まれの大阪育

ちで、今も大阪に住んでおります。私の実家は両親と私の三人という、典型的な核家族でした。

さて、みなさんのおうちにはお仏壇がありますでしょうか。お寺にお参りくださっているみなさんなので、だいたいのおうちにはお仏壇があるかもしれせん。私の実家にはお仏壇がありません。お仏壇に手を合わせること、お念仏申すことも知らずに育ちました。

「おてつぎのお寺」というのも父が往生するまで、ありませんでした。

ですから、自分の家のご宗旨がなんなのかということも知らずに育ちました。大学は龍谷大学に通っていましたが、仏教にご縁ができたのはここ数年のことになります。

〈帰敬式、法名〉

わたしには二人、娘がおります。そのうちの長女が、大阪の本町にある相愛中学校に進学しました。相愛中学校は本願寺の宗門校です。

相愛では、朝夕の礼拝、週に一度の講堂礼拝、月に一度のご命日法要、そして親鸞聖人の降誕会法要、報恩講法要を大切におつとめています。

わたしも保護者会の役員をさせていたでいて、降誕会や報恩講の法要にお参りさせていただきました。そうすると大学の時に歌った恩徳讃や真宗宗歌が思い出されました。学生の中には出なくちゃいけないから出た法要で歌っていた歌が、実は身に染みていたということなの

かもしれません。

相愛高校を卒業する生徒さんは、ご本山に卒業奉告参拝に行きます。そのとき、帰敬式、おかみそりを受けることができます。相愛の生徒さんは大変素直で、ほとんどの生徒さんがおかみそりを受けます。そのときに保護者も一緒におかみそりを受けることができます。そのおかげで、長女と一緒に帰敬式を受けることができました。

帰敬式を受けるといたただけるものが三つあります。法名と、記念の門徒式章と、お念珠です。今日の門徒式章はその時の式章です。

ご案内のはがきにも紹介していただいていたのですが、わたしの法名は「釋浄真」といいいます。

ほかのご宗旨では戒名と言いますが、浄土真宗には守りなさいと言われる戒律はありませんから戒名ではありません。

浄土真宗では法名と言います。わたしたち門徒は「仏法、おみのりをよりどころとして生きていく」のですから、法名なのではないかと思えます。

この法名ですが、二枚の紙が入っています。一枚には法名が書かれています。もう一枚には、この法名の出典、いわれが説明されています。

「釋浄真」という法名を見たときに、はっとしました。

というのは、亡くなった父の法名が「釋浄道」と言って、同じ「浄」の文字が入っていたからです。

そして、この法名はとても説明しやすいですね。浄土真宗の「浄」に、浄土真宗の「真」と説明すれば、たいていわかっていたいただけます。

この法名はわたしに「浄土真宗の門徒として、おみのりをよりどころとして生きていくのだ」ということを示しています。

名前には、名前を付けてくださった方々の思いや願いが込められています。私の俗名は「あゆみ」ですが、これは母が「いしだあゆみ」さんのファンだったからです。母の思いが、この「あゆみ」という名前に込められています。

同じように、私がいただいた法名にも、阿弥陀さまの思い願いが込められているのでしよう。私の生きていく道、生き方を示してくださっているのだと思えます。

を思っています。

もし、みなさんの中で、帰敬式、おかみそりをまだ受けておられない方がおられましたら、ぜひ、帰敬式、おかみそりを受けていただいて、阿弥陀さまの思い願いの込められた法名を受け取っていただきたいと思えます。

(次号に続く)

聞見会会員、御同行の小合あゆみ様から興禅寺様の報恩講でお話した際、の原稿を掲載してもよいとのことでしたので、この場で皆様にご紹介いたします。少々長文ですので、数回に分けて掲載いたします。

お知らせ

聞見会では、毎月の念仏会や勉強会を始めとして、各種イベント等を企画、開催しています。また、インターネット上では、「仏教どうでしょう?」という番組を放送しています。

もんけんかいねんぶつえ 聞見会念仏会

・毎月開催

・開催予定日はウェブサイト

(<http://www.monken.org>)

にてご案内しています。

「聞見会念仏会」は、ただただ、声に出してお念仏をしようという集まりです。

ただ「お念仏をするだけ」と言っても、そういう「場所」って実はそんなに無いかもしれません。外でお念仏をすると、人の

目が気になる。じゃあ家でお念仏したら家族から「どうしたの?」なんて目で見られてしまう。今の世の中、実は「安心してお念仏が出来る場所」というのは、それほどなくなってます。まったのかもしれない。

「念仏会」は、安心してお念仏ができる場所と時間を、という慈海の思いから始めた集まりです。ですから、お念仏をされる方なら、どなたでも遠慮なくいらしてください。そして、一緒にお念仏の響きを聞かせていただきます。

また、お念仏の合間では、御法話を聴聞したり、仏様のお話で盛り上がりたりという楽しみもあります。

その月の「念仏会」の予定は、聞見会ウェブサイト (<http://www.monken.org>) でご案内しています。ぜひお気軽にお越しくださいませ。

書いて・聞いて・味わう
仏教講座

開催日..毎月第四火曜日

時間 ..夜七時~八時半

場所 ..スペースおいち

(福井市中央一十七七一)

ビッグアップルビレッジ二階

会費 ..千円

※開催を変更する場合は聞見会のウェブサイト上で告知しますのでご確認ください。

〔書いてみる〕

いわゆる「写経」のような堅苦しいものではありませんが、筆ペンで、「正信念仏偈」を書いていきます。一講座のうち、漢字五十六文字くらい(回によって異なります)ですので、気軽に書いてみましょう。字の上手

い下手は気にしないで、筆で書くという動作を通して、「仏語」に真剣に向き合いながら、その「言葉」のもつ力に触れてみよう、という試みです。

〔聞いてみる〕

書いた文字を、声を出して一緒に読んでみます。そして慈海が、その言葉の味わい方を、ほんの少しだけご紹介します。

〔味わう〕

仏語を目で見て、手で書いて、耳で聞いて、そしてその響きを「味わう」のが、今回のコースの目的です。言葉がひらいてくれる、「言葉を超えた世界」を、味わってみましょう。

☆特典☆

スペースおいちさんより、参加者の方全員に、筆ペンのプレゼントがあります。

ネット放送 仏教どうでしょう？

- ・朝晩の勤行をネット放送
- ・インターネット上で配信中。
(<http://www.ustream.tv/channel/hongwan>)
- ・放送予定はフェイスブックページでご案内しています。
(<https://www.facebook.com/do.Buddhism>)

不定期ながら朝晩の勤行を放送しています。といつても、慈海が自宅の仏間でお勤めしている様子をそのまま配信しているだけですが、お勤めの後、短いお話などもしています。また、突発的に「ネット法座」と題して、ライブで慈海とネット上で語り合う機会もあります。さらに、ゲストをお

呼びして対談や勉強会の様子を放送したり、イベントや御法話の生放送も行うことがあるかもしれません。

本願寺吉崎別院 御忌中に イベント開催予定

蓮如さんのご遺徳を偲び、蓮如さんと一緒にお念仏をよろこぶ吉崎別院の御忌（蓮如忌）が近づいてまいりました。この期間中、聞見会では吉崎別院の門徒会館をお借りして開催の予定です。開催内容が決定次第、開催日時の詳細と合わせて、聞見会ウェブサイトでご案内します。

会員を募集しています

聞見会では、会員を募集しています。といつても、現在のところ会費などは頂いておりません。また、会員としての義務も特にありません。一緒にお念仏して、一緒にこの教えを聞く仲間が、この聞見会の会員と考えています。

そして、もしお力をおかしく下さるなら、念仏会の会場探しや、お念仏の味わい等を新聞掲載のため寄稿して下さると、とてもありがたいです。

お問い合わせは、
info@monken.org
まで。



■ 会計報告 ■

聞見会は、会員の方々からの御懇志で運営しています。

この度、聞見会の口座を用意いたしました。これに伴い、聞見会の活動資金の内訳についても公開することといたしました。そして、来年度（平成二十七年四月）の活動分から、会計報告をいたします。

また、それまでの活動に関する会計報告についても、次回の聞見会新聞（平成二十七年六月発行予定）及び、聞見会ウェブサイトで公開いたします。

改めて、これまで御懇志（寄付）を下された方に、この場で御礼を申させていただきます。ありがとうございます。

聞見会代表 慈海 拝合掌

聞見会へのご寄付は

こちらの口座に

お願い致します

ゆうちょ銀行

記号：13310

番号：5415221

なまえ：モンケンカイ

※個々のお名前やご懇志額は、個人情報保護のため公開いたしません。

■ 広告掲載 ■

本紙面上に広告を掲載いたしませんか？ 詳細は左記メールアドレスまでご連絡ください。

「広告掲載のお問い合わせ」
info@monken.org

■ 編集後記 ■

ある方が、「この世に生まれてくるとき、人は真つ白な答案用紙を持って生まれてくるのだ。その真つ白な答案用紙に、自ら問いを書き入れ、そしてその自ら発した問いに、また自らの答えを書き入れていくのだ。」とおっしゃったそうです。

背表紙の「聞見会について」でも記載している通り、この聞見会は「安心してお念仏ができる場所をつくらう！」という考えから始めた会です。

宗教というのは、時として「観念」のみがひとり歩きしがちです。なぜお念仏をとるのか？なぜ仏教なのか？と言った問いと、それに対する観念的な言葉の上だけの答えで完結してしまいがちです。

しかし、私達が生きている世界は、そのような「辞書的な答え」に収まるような場所ではなかったはず。「行」を離れた仏教はありません。

「なぜ念仏するのか？」それは、「あなたは誰なのか？」という問いと同義かもしれません。

そして、「安心してお念仏できる場所」というのは、「あなたは誰か？」という、答えのない問いを、安心して問い、聞いて行ける場所でもあるのかもしれない。

どうぞ、一緒にお念仏しましょう。あなたが、安心して「お念仏出来る場所」が、ここにあります。

（慈海記） なんまんだぶ

聞見会について

聞見会は、浄土真宗本願寺派僧侶釋慈海が代表を務める、お念仏の会です。「安心してお念仏ができる場所がもつとあつたら」という思いから、この会を立ち上げました。

お念仏は易行（簡単な行）と言われるですが、現代社会でも果たしてそうでしょうか。

「周りの目が気になってお念仏できない」「宗教というだけで白い目で見られる」「お寺はどれも敷居が高くて入りづらい」「法話というのほどうも堅苦しい」「足が悪くてお寺に通えない」「耳が悪くてご法話が聴けない」そんな声をよく聞きます。

浄土真宗は「安心して不安を生きる」ことのできる宗教です。汚く醜くみつともなく生きて生きて死んでいける宗教です。綺麗事ではないこの現場で、どうぞ一緒に、そのままのおすくいを聞かせていただきますよう。

聞見会代表 釋慈海 拝
なんまんだぶ

「聞見会」という名称について

「聞見」とは「眼見」に対する語です。自らの眼で見て明らかに認知することを眼見、聞いて理解し信知することを聞見といえます。

『涅槃経』には「見に二種あり。一つには眼見、一つには聞見なり。」とあります。これは、諸仏は一切衆生の仏性を、手のひらの上にのせた阿摩鞞菓を見るようにはつきりと知ること（眼見）ができるが、十住以前の菩薩等はそれができる。しかし、仏の教法を聞くことで自らの仏性を知らることが出来る（聞見）、というお示しです。

浄土真宗では、この「聞」ということをとても大事にしています。お覚り、仏、真実というものを、この眼でつぶさに見て知り得ることのできないこの我に、仏の方から、「可聞可称」聞くことができ、称えることができるすがたと成つて至つてくださったのが、お念仏であります。

これを、供によるこび、そしてまた、供になんまんだぶなんまんだぶなんまんだぶとお念仏をこの耳に聞く会（会座）という意味を込めて、この会の名称を「聞見会」としました。

コンテンツ

『阿呆墮落偈（きくそ）』

『念仏会』（ブログ「用管窺天記」より）

法話「今将談仏力（後席）」

御同行「小合あゆみさん（第一回）」

お知らせ

聞見会について

編集後記

※連載「念力門」はお休みしました。
第二回は次号掲載予定です。

次号

次号（第五号）は、平成二十七年六月に発行予定です。



聞見会ウェブサイト
<http://monken.org>

インターネット放送
「仏教どうでしょう？」
<http://www.ustream.tv/channel/hongwan>

聞見会新聞 第四号

平成二十七年三月二十二日 発行

発行 聞見会
発行人 釋慈海
編集 釋慈海



この配布物および聞見会についてのお問い合わせは、左記までご連絡ください。

〔住所〕

〒919-0476

福井県坂井市春江町針原20-31

聞見会 釋慈海宛

〔電話番号〕

090-3295-8969（釋慈海）

〔メールアドレス〕

info@monken.org

※聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶の釋慈海が主宰する聞法の会です。

※本誌はフリーペーパー（無料）です。聞見会員ならびに賛同して下さっている方々の御懇志とご協力によって発行しています。合掌